HITOKOMART No.12

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

スマホの光

今どき蛍の光や窓の雪あかりで本を読む人はいないだろう。いざという時にはスマホが強い味方である。

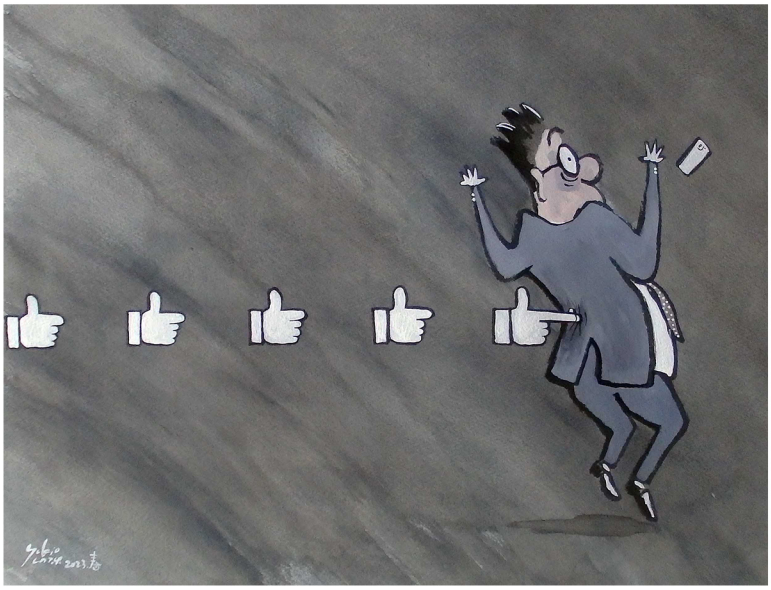
しかしこの光がいささか興ざめとなることもあり、迷惑に感じる事も多い。

蛍はキレイな水辺での夏のごく短い期間の楽しみだが、スマホの光は季節を問わず、夜の街中を動き回っている。

人を集める

日本の夏はスイカと花火である。スイカは新しいフルーツやジェラートに押されて目立たなくなったが、花火は全国各地で観光の目玉イベントになっている。しかし人ゴミの嫌いな僕にはあまり興味が湧かない。

控え目に自宅の庭先で子供たちとやったファミリー花火レベルが良い。そして線香花火が一番だ。線香花火に人生を語る人も多いのはその燃え方の妙である。暗闇の中で火花が『人』の字に見える事がある。



変　異

SNS上で使われる「👍」の数には特にこだわっているわけではないが、してもらうとそれはそれで嬉しいものである。会った事もない不特定多数の人からの『いいね』は自分への支持だと思ってその数を自分のエネルギーに変える人も多い事だろう。しかしこれがふとしたことから突然逆転し、攻撃の対象と変わる危険性も多分にはらんでいるのだ。ネット民の価値観、考え方はとても移り気で不安定なものだから。

好奇心

幼い頃、親にしかられると「サーカスに売ってしまうで！」とよく言われたものだ。
だから団塊世代の子ども時代はサーカス団にはそういう身の上の子どもたちがたくさんいて、辛い環境の中で苦しい訓練を受けているのだという風に思い込んでいた。
そんな幼少期の刷り込みからか今でもサーカスに対するイメージは何となくミステリアスな一般世間とはちょっとちがう特殊な空間と感じてしまうところがある。
だから今もあのサーカスのテントには、子どもの頃に抱いていた好奇心や恐怖感とともに、謎めいた空気感を連想してしまう。

バランス石頭

「ロックバランシング」と言うのだそうだ。
自然の中に転がっている石をバランス良く積み重ねて見せるアート作品のスタイルである。
普通に考えたらとても積み重ねることは無理だと思われる石が小さな接点だけで絶妙のバランスで積みあげられている情景は、まさにアートとしての美しさがある。
オリンピックの種目に加えられることになったブレイクダンスの最後の決めポーズとちょっとイメージが重なって見えた。

Wi-Fi

7年ほど前にニューヨークを一人でうろうろした事がある。小さな地図を持ってはいたがWi-Fiが完備されていたのでスマホの地図アプリを活用した。スマホの画面をチェックしながら中心街からかなり離れたエリアに入り込んで歩いていたのだが突如道が分からなくなってしまった。スマホの画面が全く変わっていない事に気がついた。どこかでWi-Fiの接続が切れてしまっていたのだ。こうなると全く知らない街で右も左も分からない、おまけに日本語は通じない。稚拙な英語力でどうすれば良いのかうろたえてしまった経験がある。最終的に行き着いた地下鉄の駅から路線図を確認してホテルまで戻って来る事ができたのだが冷や汗をかいた。京都の街中を歩いていると殆どの外国人観光客はスマホ片手に街を闊歩している。昔は車の中に道路地図町はいつも入れていて、初めての道を走った後は必ず道路地図で道を確認して道を記憶するようにしていたが、その習慣は無くなった。確実に地図スキルは衰えているように思われる。

地下鉄・扁桃線

トンネルを抜けるとそこにはいつも新しい景色がある。川端康成の『雪国』の語りとは異なるが、走る電車の先頭車両の正面に立って流れてゆく線路の先を眺めるのはいつの時代も子供にとっては電車の楽しみの一つである。

電車が暗闇の中に突入後、はるか先に見える小さな明かりの点が次第に大きくなって近づいて来るのを、ガラス窓に顔をくっ付けて見ながら、運転手気分に浸っていたものである。

そんな時はガラス窓に写る自分の顔の真ん中に、明るい出口がいつも見えていてそれは希望に向かって走る銀河鉄道にも似た高揚感があった。